往行しすぎたと思うのです。そういうものがすべて無駄だというのではなく、その分に応じたあり方をしなければいけない。模倣的反射運動では帝国主ギ体制の政治的リアリズムを打ち崩すことはできないことが、もうはっきり自覚できたと思うのです。

言って悪いですが、観念的・心情的ラディカリズムは私の方の――宗教の方の営業範囲じゃなかったですか。

権力のもっている政治のリアリズムに完敗した、それが連合赤軍における内的矛盾であり敗北であったろうと思うしまた、一方にある転向の問題も同質同根の問題であると私は思うのです。

しかし、真に革命的な政治潮流というものは、ゆずや文学的、哲学的、宗教的心情左翼を乗り越えて生まれてくるだろうと私は確信しています。したがって私も安心して坊主にとどまれると思っているわけです。

最後に、帝国主ギ権力の追いつめられた自己表現が、今日のファッショ的な弾圧状況であることを確認しておきたいと思います。今日のこのようなちっぽけな集会でも、権力はおびえている。なぜですか。「狂気集団」の主催だからなのか。超過激集団の救援会が主催しているからなのか。そんなことはありません。彼らが怖れているのは「真理と正義」をだれが担っているのか、それを知

っているから怖れているのです。そこらへんでちょろちょろしている私服や機動隊がそう思っているかどうかは知りませんが、少くとも権力の中軸部は知っているから怖れているんです。

こういう時にわれわれは力をだして、弾圧に抗していかなければ、力をだす時はないでしょう。力とは何か。理にしたがって真理と真実と正義を大衆の前に明らかにしていくことです。弾圧という暴力によって、いかなる真実と正義をおおいかくそうとしているのか、そのことを明らかにしていかなければならない。自らの過ちをただすこと、自己批判すること、それも当然しなければなりません。と同時に、人間の、人類の、真実の解放とはどのようなものであり、いかなるプロセスで実現されていくのか、その論理を明らかにしなければならないでしょう。

正面にいって、今日われわれは危機と困難に直面しています。需要問題を解決しなければ、弾圧のたたかいも救援活動もできない論などということを言いだす者もいます。権力側の思うつぼに絵に書いたようにはまりこんでいるんです。弾圧というものは、特定の個人や、特定の集団にかけられているのでなく、理由のいかんを問わず全国民にかけられているんです。軍事侵略体制の強化のために、反政府、反権力、反体制のすべての運動、思想、言論、意志に対して その壊滅をねらっ

弾圧であることは明々白々じゃないですか。

このことを明らかにして、大衆的な抵抗戦線の構築を急がねばなりません。それが、一介の坊主である私の任務であると心得ております。どうか皆様方のお力ぞえをいただきたいと思います。

この講演を「感涙」の犠牲となられた若き「兵士」らの霊前に捧げ、回向の一端といたします。

南無妙法蓮華経　　合掌

1972年3月31日

① 同志殺しの内因をえぐり出し、自己批判をとことん貫徹せよ！

② 銃撃戦支持の名の下に同志殺しをアイマイ化させる公害企業的態度を批判せよ！

③ 革命の暗黒を吹き飛ばし反動の嵐に勝ち抜ける赤々とした火を燃やそう！

④ 階級闘争はするが究極は無の銃撃戦ではなく、プロレタリアート独裁をする銃撃戦のための地下武装労働党を建設しよう！

⑤ 佐藤政府打倒！

共産主義者同盟赤軍派
世界赤軍兵士　上野勝彦

Ⓐ同志殺しの反革命的意味と公害企業的態度

赤軍とは、プロレタリア権力、プロレタリア独裁の主柱たるべきものである。ところで連合赤軍の同志殺しは、「あんな事をやる連中に将来権力の主柱などまかせたらどんな事をされるかわからん。あんなやつにまかせるわけにはいかない。」と広範なプロレタリ

アート人民をして思わしめたのであり、このことの反革命的意味の重大さについては、言うまでもない事であると思っていた。僕はその事は言うまでもないこととして前提とし、それ故に、先ず第一に自己批判から始めた。ところがいくつかの公害企業的態度に接して、先ず、なぜ自己批判をしなければならないのかから説明しなければならないようだ。

プロレタリアート独裁は反革命を抑圧するのである。赤軍内で従って、反革命兵士が現われた場合（スパイ、自己批判で直し得ない意識的裏切り等々）、それを処刑する事については、プロレタリアートの司法綱領、共産主義的法意識にもとずいて適切に行なわれる事はあるし、しなければならない。ところで、今回の連合赤軍について見た場合、あきらかに反革命兵士の処刑ではない。ブルジョアマスコミを通じてさえ、そこにはあきらかである。その判断の根拠は㋑処刑された同志のうち数人の知人、友人がいるが、それが反革命兵士ではないと自信を持っていい切れること㋺知人友人がいるからということだけでそんな判断は信用出来ないと僕の判断をうたがう人には㋑では納得しないだろうが、処刑をした連合赤軍の逮捕者が自殺したり、転出したり、逃げていた者が自首したり、処刑者が埋葬場所に行ったりして総くずれになっているがもし反革命兵士の処刑として共産主義的自覚に

あふれる確信を持って行なわれた行為なら、一部に自供など少しは出るかもしれないがほとんどが完黙を維持するだろうと思うこと　㋑㋺㋩の処刑された同志の名前や処刑者の自供、転向自首等々を、それはマスコミから得た情報だからそれも信用出来ないと言う者に対して、僕はマスコミの判断は信用しないが事件、事実に関しては全部フィクションでデッチ上げだとは考えないし、Yなどが埋葬場所で写真をとられて新聞に載っている写真などデッチ上げ写真とは考えない。

ところで公害企業的態度は「彼等に情報源が一方的に独占されている以上、マスコミに対して一切信用すべきではない」（ある同志）と言う。僕は一切信用すべきではないのではなく前後の事情、原因経過等々はわからないとしても、14人の反革命兵士ではない同志殺しが行なわれたという事実は信用する。14人の同志が殺されたという結果、この事実さえあきらかならば他の事情は一切わからずとも、連合赤軍はプロレタリアート独裁という展望をすべて破壊してしまったという事が結論されるのである。

同志殺しをするようなプロレタリアート独裁、そんなものをだれが信用するだろうか？　公害企業的態度は「決してこの規律は非人間的ボルシェビタリア的専制的恐怖政治的なものでは絶対になく、共産主義の原則とするものである。」「今回の同志殺の規律の問題は」に関しては一切の論評を事実は

っきりするまで絶対に逃げよ！沈黙の苦悩に耐えよ！」（ある同志）と『人民の軍隊一人民のあり方、及びそれを包括するところの人民内部の団結のあり方、そしてその矛盾のあり方』の問題として……近い将来…長期にわたって…」（もっぷる通信第7号日本赤色救援会声明その2）などと言っている。まだ、カドミウムとイタイイタイ病の関係は云々、の公害企業と同じだ。すでに、結果と関係だけはハッきりしているのだ。関係の内容即ち、カドミウムがいかなるメカニズムを通じてイタイイタイ病に至るかは病理学的に解明されていたくとも。イタイイタイ病患者は、関係の内容はわからなくとも、関係をえわかれば、ガーガー論評するし、沈黙を絶対にしない。

公害企業的冷たい態度をきれいにさっぱりと捨てさり、プロレタリアート独裁という革命の利益への展望を奪い去り、革命の暗黒をもたらした事をここん自己批判すべきなのだ。そして、その自己批判の内容をこれから豊富にして行くこと、それを、未だわからない内容の調査研究分析を通してやるべきであって、その逆ではない。

Ⓑ公害■企業的態度と内因

1.銃撃戦と同志殺しの「不可分の冷厳たる現実」について、

赤色救援会声明は、「両者は不可分の、冷厳たる現実であるにも拘らず云々」として、銃撃戦支持、同志殺し反対云々の態度を表明している。形而上学的分類で、両者が不可分ならば、態度は、銃撃戦支持、同志殺し支持か、銃撃戦不支持同志殺し不支持以外の態度はない。片方不支持とかその他の態度はない。ところで弁証方的立場から見れば、両者は不可分でありながらその両者の持つ内容が違うが故に、それにふさわしい態度をとるのである。銃撃戦をブルジョアとプロレタリアという階級闘争のあらわれとして、支持するが、プロレタリアと共産主義の点からは同志殺しというプロレタリアート独裁の展望を否定し去った連合赤軍故に支持しない。これが正しい立場である。（マルクス、結社の自由、ただしあらゆる結社を支持するとはかぎらない。レーニン、民族自決、ただしあらゆる民族運動を支持するとはかぎらない。）実は赤色救援会声明は、両者を不可分と言いながら、共産主義者としての態度がアイマ■イなために、分けて、銃撃戦という階級闘争のあらわれの中へ、プロレタリアート独裁の展望という階級利益を従属させて考え、カドムムのうちにその利益を奪い去っているのである。共産主義者が他のプロレタリア政党と自らを異にするのは、万国のプロレタリアートの普遍的利益を守る事と、ブルジョアとプロレタリアが結ぶ種々の発展段階の全運動の利益を守ることである。あさま山荘の銃撃戦は、銃撃戦という発展段階、これからます

ます革命戦争が必要だという発展段階を示したにすぎない。そこには、しかし、プロレタリアート独裁へ至る階級の利益を守る内容が連合赤軍に幻想を持っていた時にはあるように思われたが、そうした幻想が事実によって粉砕された今では、ありえないし、従って支持するか支持しないかで、すべてを色分けするやり方は、どうしても共産主義の態度を放棄し、階級闘争はするが見極は無なる道、プロレタリアート独裁を否定するブルジョア無政府主義の立場以外の何物でもない。日共がよく、新左翼に対して、日共に反対するから反共だ、などこいうが、そんなやっかみ的態度を、公開企業的態度を、全面的にとはいわないが若干赤色秘援会的に見る。我々は、階級闘争のあらわれに銃撃戦支持の下にプロレタリアート独裁を売り渡すことはなく、プロレタリアート独裁の利益の下に銃撃戦を組み込む事が大切なのだ。

連合赤軍の武装闘争のリアリティこそ、英雄的闘争だ、と口々言っているが、まもなくそれは、この一年の連合赤軍の主導的立場への讃辞にしかすぎないのだが、連合赤軍をも踏み越えてまだまだ我々は前進しなければならない時、何かあるまい迄の銃撃戦以上の事は出来ないこどもいわんばかりにプロレタリア人民の力を信用せず、自力がそれを越える指導性を発揮しようとせず、階級利益を忘れてしまってコンプレックスの裏がえしとい

ブル的せんぼうでもって「讃辞」を送るような態度はとるべきではない。

2.「党内闘争一処刑」ではない、同志殺しだ。

赤軍声明は、「党内闘争一処刑」を前後して」と述べている。これは、同志殺しの内容を、党内闘争であると言わんばかりである。僅には同志殺しという事以外にはわかこないのだが、それ以上に「党内闘争一処刑」という事を知っているなら、革人民の軍隊一人民の関係のあり方、各々、それを処理するところの人民内部の団結のあり方、そしてその矛盾の立場のあり方より問題として」などと形式を言うのではなくその内容に入れるべきである。こういった党内闘争で、どう関係のあり方、団結のあり方、立場のあり方が問題になったという概略をはっきりさせるべきである。知らずにそんな事を言うから同志殺しの持つ政治的反革命的意味をゴマカすために故意に企図しているとしか思えない。

3.連合赤軍女性の苦闘にこそ具体現された武装闘争のリアリティをこきおろすべきである。

ボーヴェンゲッハは、軍事芸術についての、見のがせない点検が必要な事を述べている。ブルジョアロマンティズムでもって「苦闘」に酔いしれて、きびしい点検を放棄するような立場はとるべきではない。こきおろし、こきおろして、なお生を抜けるだけのプロレタリア軍事芸術を作るのが我々の

立場であって、こきおろすとポシャルような何かこきおろすと右翼反革命になるのではないかという不安を持たねばならないような（日共が言う反共論のごとく）そんな弱々しい立場ではなく、きびしい点検が冷静になされるべきである。みごとなご立ってゲリラの基準を放棄して同志殺しなどこんどもないことだ！等々、こきおろすべきだ。こきおろすだけの勇気もなく、事態をアイマイにして「苦闘」とか「リアリティ」とかを讃美しこれから二度も三度も面ごとツを踏めこ言うような立場はとるべきではない。「こきおろし」にもブルジョア路線のこきおろしと、プロレタリア路線のこきおろしがある。ブルジョア路線のこきおろしに反撃するあまり、こきおろしという事に反対し、その事によってプロレタリア路線のこきおろしまで流い流す、ブルブル的日和見主義はわれわれ態度ではない。銃撃戦をまつり上げるためでなくそうに徹底的に、千倍、万倍にするために断固支持せよ！こうして千倍万倍を、プロレタリアート独裁に結実させるために連合赤軍をこきおろせ！

4.人格論議をせよ。

人の要素はアーである。これは、ブルジョアとプロレタリアの領域ではなく、プロレタリアと共産主義の領域の問題であり、プロレタリアの団結の内容を高めることによってよりブルジョアを粉砕出来るようにするため、共産主義的人格を確立

するために、とことん重要視されねばならない。内容の高次化をもって敵との区別をより鮮明にする立場、これが、全日成同志の主体思想であり、毛沢東同志のレーニン主義を発展させた内容であり、我々が攻撃型革命とよぶ内容である。敵との区別をしとけば、あこはどうでもいい、こういう思想では勝てない。内容の共産主義的高次化、従って先ず自己批判をあって、我々はそういう作風を身につけるべきである。

同志殺しの内容は何だったのか？考えうるあらゆる内容をこの際徹底的に吟味し、えぐり出し、自己批判すべきである。連合赤軍の場合、それらすべてが関係あったかどうか具体的にはわからないこしても。その内容の中に、人の要素もあるし、人格論議をすべきである。これがこの共産主義ふそういうことをやりぬかねばならない。もちろん、ブルジョア・マスコミのように、だらしのない病的性格異常だ、などのような論議にすべきではない。しかしそれにしても、赤軍のように「論外」と言うわけにはいかない。僕自身も今ちょっと体の調子を悪くしているが、左翼の体力が弱いという問題、よく、右翼に知力なく、左翼に体力なくと言われるが、この片輪的情況をいかにしても突破しなければならない。プロレタリアートの体育綱領の確定にむけて、このきい、徹底した、いかなる悪意にみちた議論の中からでも、学

ばなければならない。精神労働と肉体労働の分裂の止揚、などと口先で、精神労働的に言っても事態はノミの少ととびも前進しない。

Ⓒ内的分析と自己批判 ― 党組織哲学

多くの同志、友人、知人から様々な意見を聞いている。

「戦前の転向を思い出させるようなムセッ〜ンな組織ぐるみ事件には本当にはき気をもよおします。革命は人民の血の歴史の上になりたつべき事を絶対に忘れてはいけないと思います。『過激主義事件』の後は転向しようが自殺しようが一面におびまいなしなのはほぼ新左翼の全体の体質である、ようです。『赤軍』の腐敗は外から見ていても本当に根深いものです。思想がない。」（ある友人）

「上野君、残念なことだ、破局的なことになった。〈反動〉がおこっている。この闘いは、革命的左翼にとって瀬戸際である。大衆の意気をそぐ権力のセンメツ攻撃、階級闘争の当面の眼目の圧殺 ― これと闘いぬくためには、事態を正視し、自己の弱点を克服し、大衆に確信をもって、この事態について、うごかねばならない。永田、森一派による誠実な同志2人のリンチ殺人は事実であり、殺された同志たちはもちろん、裏切者などではありえない。この事態はもちろん連赤の路線の誤りと不正分ではあるが、そう一般化してはダメであり、君の云う〈内ゲバ病〉の極端なあらわれであることをとらえることが問題の眼目です。殆んどの左翼が、この事態について語る言葉を失ない、権力の攻撃に武装解除しているのは、そして日和見党派に城をあけわたしているのは、森、永田一派を弾劾することが、同時に自分たちの内ゲバ病の思想的発芽などにはありえないからであり、それをさけ、いしゅくしているからです。これは異常な危機です。ぼくらは、全く孤立した苦汁を強いられています。上野君が、内ゲバ病克服の観点から、この事をえぐりだし、革命全体の利益のために、革命家の革命のための闘争の先頭にたってくれることを切望する。」（友人）

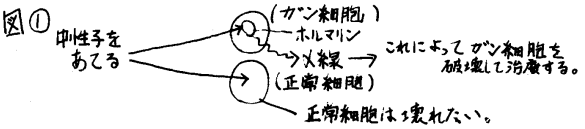
「三月に入っても寒さ一向に衰えず、春未だ ― の感深しです。兄にも春の訪れ未だ ― 実に残念に思います。去月末より暗いニュースは胸の痛くなるばかりでやりきれません…遠くともきっと春がやって来ることを念じつつ、かしこ」（薩摩藩出身のある家族）「山岳アジトにおける信じられぬ同志達の処刑は上野兄には多分あまりのことに心を痛め胸を痛めていることと思います。…人の要素をオーにすべき秘々が、どうして十数名に多くの同志たちを殺さねばならなかったか、私には理解できないからです。…」（ある同志）

「今はわからなくなっているんです。でも僕は革命兵士です、どんなことがあろうとも。」（ある同志）「あさま山荘の…全くすばらしい戦いぶま

の影響力の大きさを思う時、軍事の思想の整風の必要性を感じます。」（ある同志）「今、私が云い得る事は〈批判↔自己批判→団結〉の徹底化、党の整風運動の強化を党形成と同時一体的に成して行く事と…」（ある同志）その他、序章、人民救援会、等々。公害企業的態度でまこういった様々な心ある態度に答える事は出来ない。こゝまでくれば、ほぼ、内因の分析を通じての自己批判をなぜやらねばならないかは、ほぼわかって人れた事と思う。では、内因分析と自己批判を、と論を進めずに、こゝでは、そういう党風確立のため、党組織および路線に一元化しえないその哲学的基礎として唯物弁証法について若干見ておこう。なぜなら、今回の事件は、党組織哲学（内因の共産主義的高次化）、党組織（内因が外因とわかち持つ内因の運動路線）、および党組織そのものとして物質化されるべきものだからである。この方向へ向って自己批判は貫徹されねばならない。ただし、銃撃戦支持という現在の階級闘争の段階、革命の暗黒の歴史的階級的反革命位置を忘れて、物質的基礎を失ったり精神生産としてそれをやるという観念主義的閉鎖的硬教的方法をとるような事をしてはならない。以上の前提の上に、党組織における内因の共産主義的高次化とは何かについて述べる。

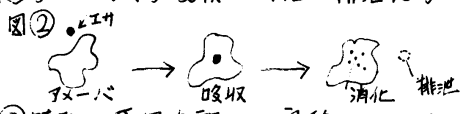
例①脳ガン腫瘍の原子炉利用の治療について、

図①



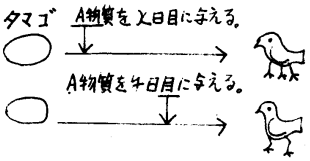
例②アメーバの吸収―消化―排泄について、

図②



例③畸型の原因を調べる実験について、

図③



以上の①②③の例から説明しよう。ガン細胞と正常細胞では、細胞の内因が違うので、それを利用して治療する事が出来る。ガン細胞にはホルマリンがあって中性子をあてるとX線を出し、これによってガン細胞は破壊されるが正常細胞は破壊されない。これは、党細胞で、内因が悪いと外から中性子のような何かの作用をうけた時、連合赤軍のように同志殺しの組織破壊をもたらすが、内因の悪い要素を排泄し、内因を良くしておれば、破壊されない事を示す例である。ところで、党組織、路線とは内因を良くするといった問題とは若干異なる。高校生が、大学へ行こうとか、就職し

ようとか、まあこういった事を綱領、路線と考えると毎日食事をしたり、便をしたりが、党綱領哲学＝内因の問題と言える。毒を食べて死んじまえば大学も就職もパアなのである。マルクス・エンゲルスの綱領のもとでもドイツ社民が大裏切りをやったり、レーニンの綱領のもとでもスターリンが大裏切りをやったり、連合赤軍でも、まさかと思うような事が起るのは、綱領、路線というだけでは処理しえない日々の吸収―消化―排泄の内因処理の独自の体系を持ち合わせていない事に責任がある。毒は吸収しないようにすること、まちがって吸収した毒は排泄するようにし消化しないようにすること、こういう事を毎日毎日気おつけてやっておかないと、健康な体もいつのまにかイタイイタイ病になったり、水俣病になる。党細胞がアメーバとすると、連合赤軍というエサを吸収した以上、銃撃戦を消化し、同志殺しの内因を排泄しなければガン細胞の破壊のもとにあう。同志殺しの内因を排泄し、クソとして外へ放り出すこと これが自己批判による内因の共産主義的高次化という事である。ところでそんな内因内因言うんなら皆んな共産主義者になれ言うようなもんだが、そんな事は無理だと言う声が出そうだ。それは心配いらない。内因を持っていればそれはいつも発現するしかたないからである。睡眠の原因を調べる実験が示しているように、脳からA物質を与えても、2日目と4日目ではたまご内の発生の内因の進行が違っているが故に、足の三本が一方は発現しても他方は発現しない。遺伝子がちっとも発現しはみだらない。 我々は以上の考察から、内因にも悪性発現の可能性があり、今すぐ主要に排泄すべきものと、あってもまだ許せるものとがある事がわかる。我々は、このような内因分析の弁証法的方法を用いて、党細胞内の政治討論、組織問題を正しく解決していかねばならない。意見が違うと、それ〆ッは〆メだ、切れとか殺はこんな誤りをした、それ切れとか、そんなふうにではなく、違う意見でも、誤りでも、それがラすぐ外科手術して体外に出すべきものなのか、そうしなくても直せるものか、正しい基準をもって正しく解決すべきである。毛沢東同志は、この分野で巨大な役割を果たしている。ハリマオイにしても、事物が内因を根拠とし外因を条件として運動するこを哲学的基礎として、西洋医学のようにすぐ外科手術をしないで、内因を変にさせることを通じて直すという革命的医療哲学を確立している。我々もこれに、ちったあ見習う必要がある。

自己批判せよ！かくて、内因を共産主義的に高めよ！ 連合赤軍の否定し去ったプロレタリア一ト独裁への展望を、病気を直す方法で直し、再び赤々とよみがえらせよ！

⑥ 佐藤政府打倒！

連合赤軍がつぶれた事によって、堅持すべき軍など、その破片はあるかもしれないが、基本的に失なったものとして以下、若干の政治方針を述べる。佐藤政府打倒の広範な政治斗争を通じて、その中に三種の軍隊を形成しうる芽を作る組織工作を全国的にやり切り、地下武装労働党建設を押し進めよ！ 銃撃戦支持たらば、当然これからも連合赤軍の千倍万倍の銃撃戦を日本階級斗争に実現しようこ必死で頑張るとのことであろうが、そうでなくとも千倍万倍にする気もなく、あれを記念碑的にもつかうためなら、無責任に支持だとは言わないだろう。千倍万倍にして、反動の嵐に勝ち抜けるようにするには、どうしたらいいか！ いしょくした決意に大胆な勇気を与える事だ。全国の学徒に①学費無期ストを佐藤政府打倒無期ストに転換し、大衆学徒ゼネストを闘う事。連合赤軍事件が教育のあり方を大きな問題としている事はまことによい事だ。プロレタリア教育綱領の立場を大胆に示す事だ。①学校は、一般に共産主義の原則を伝達するものでなければならないし、共産主義を最後的に実現する能力をもつ人材をそだてあげねばならない。肉体労働と精神労働の分裂を克服するため、革命斗争と社会的生産的労働と学問を緊密に結合すること。労農大学の結合（ここが学問）、キューバ、中国の学校こそ我々めざすものである！ ②動労住民を学園に積極的に参加のよびかけ等々すること。③こういった学生・労働者の政治的土壌の中へ、ハレンチきわまりない佐藤の動向をバクロし、その打倒の力を強めるような政治組織活動を拡大すること。全国革命戦線の再建。『戦線通信』を発行し、米一日帝の国際反革命侵略抑圧軍事路線の生きたバクロ（自衛隊の沖縄、カイゴンの動向）と世界革命戦争の生きた政治（ベトナム、パレスチナ、アイルランド、フランス、イタリア…）をしらしめること。沖縄④電報問題は昨年秋の沖縄斗争の再来をはずたらすだろう！ ④沖縄自衛隊米兵さんめっ大衆的軍事部隊と、抗議り大衆デモ部隊、これらの中に三種の我が武装政治勢力が組織工作を共産主義者同盟赤軍派として結集し、地下武装労働党建設を着実に開始すること。

3.31はブント2周年、同志追悼集会に、こういった新たな出発の合図であって欲しい。

―上原敦男（東拘）―

全ての同志諸君、兄弟達に革命的愛と連帯の精神をもって挨拶を送る。
H・J斗争二周年の今日「軽井沢銃撃戦」の「偉大なる敗北」に連帯の意志を明らかにする。
しかし、同時に連合赤軍の14人の兄弟達の非業の死に哀悼の辞を送らなければならないのは極めて残念である。

我々の前に現出している事態の根底的要因は何か？　それは明らかに我が赤軍が敵权力との攻防に勝利しえていないという否定的現実によるものである。　現■在の事態を克服する為には勝つことである。　敵权力に見事に勝利すること以外にはない。　革命戦争のダイナミズムは不抜の革命の軍隊の登場を要求している。　プロレタリア人民は、必勝不敗の赤軍の登場を待っているのだ。

にもかかわらず我々は多くの戦士と■武器を失ってしまっている。　我々は現在の敗北を全人民に自己批判しなければならない。　そうして敗北を必ず克服して人民の軍隊をして再生することを誓わねばならない。　我々の自己批判は新しい戦斗と新しい勝利の実現によってのみ証明されるであろう。　必要なのは革命主体の転換である。
旧い一揆主義的蜂起路線と完全に決別することである。

革命戦争は人民戦争である。　それはゲリラ戦

争として開始されねばならない。　しかし、ゲリラ戦争はそれ自体では最后の勝利へ到達することはできない。　ゲリラ戦争は人民戦争の実行の初期に於ける一つの戦術にすぎないのである。
ゲリラ戦争は必ず人民の軍隊―正規軍へと成長していかねばならないのである。　であるが故に、ゲリラは革命の媒介ではなく革命の中核でなければならないのであり、赤軍は革命の中核としての全ゆる主体的条件を備えていなければならないのである。　それは武器と物質的要素を重視するブルジョア軍事思想に反対し、人の精神的、主観的要素を重視するプロレタリア軍事思想を獲得し、正しい革命戦争路線によって、赤軍と人民の正しい結合を実現することである。　革命戦争は人民戦争であり、人民に依拠し、人民と連帯し、人民を動員しうる武装斗争こそがゲリラ戦争なのである。

現在の我々に要求されていることは、ゲバラのことばを借りると「重要な要素は、きたるべき苦しい戦争に備えて軍隊を鍛えることである。軍隊は厳格な規律と高い士気を持ち更に、遂行すべき任務を明確に理解し、うぬぼれ、幻想、安易な勝利に対する誤った期待などを排除しなければならない。　斗争は厳しく長く敗北することもあるだろう。　全滅寸前までくることもある。　それを救うものは高い士気、最后の勝利への確信、それ

にずば抜けた指導力だけである。」
我々はみんな未熟な革命家である。　未熟であるが故に失敗もすれば敗北もする。　しかし、未熟であることをなくす必要はない。　必要なのは失敗や敗北を克服しようと斗うことであり、人民の送の送辰としての革命戦士になる為に不断に努力することである。
我々は多くの血の犠牲によって到達した「銃撃戦」の地平を敵权力にあけわたしてはならない。
そして、同時に批判と自己批判の正しい作風によって過去の誤りと敗北を克服し、革命的に止揚して人民の軍隊＝赤軍として再生しなければならない。　それこそが14人の連合赤軍の兄弟達を革命戦争の炎の中によみがえらせることであり、我々の成しうる唯一の連帯である。
赤軍はかなり強烈なダメージを受けたが、まだノックアウトされたわけではない。　カウント・エイトだ！　まだ始まったばかりではないか！
必殺のクロスカウンターも、ローヨぎわのストレートパンチも出ていないのだ！　赤軍はカウントエイトで立ちあがっている。　しっかりと目を開けて奴らをなぐり倒せ！　敵权力を必ずノックアウトしよう！　全ての同志諸君、兄弟達、へこたれずがんばろう！
最后の勝利にいたるまでの不滅の連帯を約束しよう。

塩見孝也（東拘）

資本主義とブルジョア粉砕・共産主義万才・銃撃戦断乎支持・今回の事態を自己批判し、血の教訓を生かし、プチブル革命主義を克服し、革命戦争と赤軍の旗を更に掲げ革命戦争路線を確立し、プロレタリア前衛党を建設しよう。

関　博明（東拘）

いつの日か線を固めん、共ともに。屍の上に我らの世界を。我々はへこたれない。

前野正彦（千葉刑）

ハイジャク斗争二周年を記念する。敵階級の反動攻撃にひるむことなく前進し、第二第三のハイジャクを、遊撃戦・ゲリラ武装斗争と結合せよ。最後の勝利は我々にあり、赤軍は不死鳥である。
なし崩しファシズム侵略反革命との対決を遊撃戦ゲリラ武装斗争、世界革命戦争勝利へ。赤軍と全ての武装斗争派万才。

―川島　宏（東拘）―

同志達、友人の皆さん、そして全ての斗う皆さん！　この間の連合赤軍同志達の斗いについて書き綴った我々の文書を是非読んでほしい。
1、緊急アッピールその1「連合赤軍兵士の革命的、英雄的戦斗万才！

2.緊急アッピール　その2：「連合赤軍」五兵士の革命的、英雄的戦斗の勝利万才！　3/8

3.「あさま山荘」徹底抗戦斗争讃歌―「連合赤軍」五兵士による革命的、英雄的、献身的「あさま山荘」徹底抗戦斗争総括。　3/8

4.緊急アッピール―その3：敵奴力による謀略攻撃を全人民の団結で粉砕なる！　3/9

5.自己批判書―「連合赤軍粛清■事件」の根底的総括に向けて。　3/15

6.「連合赤軍」敗北＝解体の総括―人民の軍隊＝赤軍の再生に向けて。　槐

そして獄中の我々にも厳しい批判を寄せてほしい！　全ての斗う人々からの根底的批判を要請します。

僕は今、連合赤軍同志達による「粛清」行為が全ての斗う人民と、日本革命―世界革命に甚大な影響を与えたことに対して、率直に、徹底的に自己批判すると共に、根底的な総括に向けて、全意的、全人民的整風運動の先頭に立って斗うことを決意しています。　我々が革命戦争の途上で倒れた、14戦士の遺志を受け継ぎ、日本革命―世界革命を勝利させる為には我々に、そして日本左翼総体に血肉化している。　この様なスターリン主义の残滓を徹底的＝根源に払拭しなければなりません。

今回の「事件」は我々赤軍兵士にとっては、あ

まりにも苛酷な「現実」であり、あまりにも重い「十字架」でした。　我々は、その重みに耐えかねて、これから幾度となく立ち止ってしまうことがあるかもしれない。　しかし、我々は逃げるのではなく、勇気を持ってこの「十字架」を背負わなければならないのです。　そして、一歩一歩前進してゆかねばならないのです。　それは我々の弱さを、甘さを、否応なく打鍛えてくれるでしょう。　いや我々は、自ら進んで打ち鍛えねばならないのです。　そうでない限り14戦士の死は、犬死になってしまうではありませんか！

今回の「事件」は又、日本階級斗争を斗う全ての人々にとって、偉大な「反面教師」なのです。

そして今我々には、それを真に「反面教師」として主体的、階級的に把え返すことが出来るか否かが問われているのです！　共に前進しよう！

14戦士追悼！　英雄的5兵士の銃撃戦万才！

革命的くよど号ハイジャック斗争＞二周年万才！

―鈴木　裕（横浜刑）―

「連合赤軍」銃撃戦断乎支持！　逮捕された13人の「連合赤軍」の同志達を無条件に防衛することを前提としつつも、いわゆる「人民裁判」事件に反対する。　70年代の斗争は、70・3・31HJ斗争、12・18上赤塚交番襲撃、71・2・17銃奪取斗争、2～3月M作戦と「連合赤軍」が一身に担

い、今回の2・19～28の10日間にも及ぶ浅間山荘での不撓不屈の死斗―銃撃戦は、憎き反革命を恐怖のどん底につき落し、混迷の度を深めている新左翼の寝惚け眼の眼を覚まし、英雄的革命戦士の見本と、武装斗争の見本をリアルに示し、日本革命戦争を銃撃戦へと飛躍・発展せしめた偉大な斗争である。　敵反革命は、最近明らかにされた及新による「人民裁判」事件なるものを有効な手段とし、マスコミを大量動員して、革命斗争に対する「狂気・異常精神・極悪非道」扱いにすることにより、我々と人民とを分断させ、挙に乗じて組織破防法により、いわゆる「過激派」を壊滅させ、革命戦士に対しては、極刑・死刑攻撃により、革命戦士を闇の中に葬ろうとしている。　この様な反革命キャンペーンに対しては、ビラマキ、集会、全国の救援組織の緊密化等により、徹底して革命的キャンペーンで巻き返く、人民への宣伝を強化しなければならないと思います。　火炎ビン立法でもわかるが如く、反革命は挙に乗じて刑法改正（悪）、保安処分の新設、ローラ作戦、密着尾行、集会などでの身体、持物検査等々を慣習化させることにより、人民に心理的に制度化させ、更に社会的に公認させようとしている。粘り強い、革命的キャンペーン、人民への宣伝でこれ等を粉砕してもらいたいと思います。

―大西一夫（東拘）―

本集会に結集された全ての革命的な兄弟姉妹たちに限りない愛をこめて挨拶を送ります。

★まず何よりも14人の連合赤軍の同志たちの死を心から悼み冥福を祈ります。どんなに死にたくなかっただろう。冷たかっただろう。悔しかっただろう。革命戦争の炎の中で敵と闘って、人民の愛と真紅の旗に包まれて死にたかったのにちがいない。この悲しみと憤りを一体だれに向ければよいのか。僕は虐殺者を許すことはできない。しかし僕自身もそうであったことを否定できない。赤軍派も同じである。私達は、自己の誤りとして真剣に正さなければならない。

★連合赤軍の同志たちの陥った誤り■は、厳しい状況下と政治・組織・指導能力の極端な低下と閉鎖主義、偏執的な軍事力学主義である。これらの誤りは、共産主義政治で正しく解決することが可能である。二度と悲劇をくり返してはならない。全ての兄弟姉妹たち、今こそ共産主義思想を正しく学ぼう、人民戦争の原則をしっかり学ぼう。人民の海と銃を使いこなせる女性どちらが欠けても駄目なのだ。HJ戦士たちの赤軍魂を正しく受けつぎ発展させよう。共産主義思想と人民への愛に裏打ちされた、犠牲を死を恐れぬそして底抜けの革命的楽天主義。これが赤軍魂である。私たちは今回日本・世界の革命に計りしれない大きな罪を犯

した。人民は失望し、恐怖し反革命の嵐が思うように吹き荒れている。しかしだからこそ誤りを正し赤軍魂でもって闘い抜き、人民の信頼を回復しなければならない。そのことによってしか人民への信頼関係は回復しない。全ての兄弟姉妹たち、負けてはならない。人民と結合し、革命戦争の大道へ進撃しよう。銃撃戦を更に発展させよう。
革命戦争勝利、立派な赤軍兵士として再出発を誓って。

松田　久（東拘）

《「政党が自己の誤りに対してとる態度こそは、その党がどの程度まじめなのか、その党が実際その階級と勤労大衆に対する義務を遂行しているかを批判する上で、最も重要、最も確実な方法の一つである。誤りを率直に認め、その理由を確かめ、こうなった条件を分析し、これを是正する方法を徹底的に討議すること――これがまじめな党のしるしであり、その義務を遂行する方法であり、階級、また大衆を教育し訓練する方法である。》
（レーニン「左翼小児病について」）
同志たち、兄弟たち、そして全ゆる斗う人民よ、日本の社会主義革命戦争の端緒期＝前哨的ゲリラ戦の段階で我々はすばらしい銃撃戦と余りにつらい悲劇的斗いに出会った。想像を絶する現実の過酷な斗いを経て、防御に追いつめられつゝ去軽井

沢銃撃戦を戦い抜いた5人の統一赤軍兵士＝革命の軍隊の到達した地平を確認し防衛し発展させることは我々の立場であり、任務である。しかしこいに到る過酷な斗いの中で、一方で革命的、兄弟的団結をかちとれず悲劇的結果をもたらしていた事を痛苦の念をもって総括し、克服していかねばならない。「党の軍化」は前哨的ゲリラ戦を切り開き、展開する組織的核心であった。だが今や、それは「軍の党化」として大胆に発展させないならば「党―軍―人民」は分断され、孤立化させられ、より大きな悲劇をもたらすだろう。この悲劇の根源をブタの奴隷、マスコミはその悪意に満ちた卑劣な言葉で「思想的政治理論的に違う両組織がむりやり結合したからだ。」とか「森、永田が人間的に欠陥をもっていた」、「独裁者だ、精神病だ」とか語っている。だが、我々は赤軍派と革命左派はもっともっと強固に団結すべきだったと考える。理論的に相違があったとはいえ思想的に違っていたのではない！
思想性はなにより階級性なのだから。そして森のオヤジさんや永田姉を知っている同志たちなら、彼らのすばらしさを知っているはずだ。悲劇を個人的資質の問題にするのは、最も安易なことだ。そんないやらしい総括をしてはならぬ。僕は森のオヤジが赤軍の一切の栄光を栄い、必死に斗っていた事を知っている。我々は断乎として森のオヤジたちの革命の「生」と死んでしまった同志たちの「死」

を受けとめ、受けつぎ社会主義革命戦争の勝利のために戦い抜く決意だ。日帝のブタと犬どもはこれを機にして犯罪者という烙印を押し、都市ゲリラの芽を根絶せんとしている。我々はこれに対して、小ブル政治思想でなく、革命的階級的政治思想で対処し、階級的団結をもって反撃しよう。
九人のハイジャク「兵」の赤軍兵士たちは金日成将軍にあてた年賀状で「チョソン民主々義人民共和国で日本革命のため、訓練を受けている日本革命家の一同」として、高らかに日本人民にむけ決意を宣言している。パレスチナの同志たちも世界プロレタリア人民の連帯と日本社会主義革命戦争の前進のため、日々戦っている。ともかく今まず克服すべきは鎖国主義である。翼を拡げよ、大空高く翔け！奥いからといって厳しいからといって翼を丸めて縮まってはいけない。鷹の如く、力強く翔くのだ！　日本に於ける社会主義革命戦争は始まったばかりである。それは長期にわたるものなのであり犠牲も多く残酷な一面をもっている。だが誇かれるものか。　翔けフェニックス！
米日帝の侵略・反革命戦争を社会主義革命戦争で打ち砕れ！

―八木健彦（東拘）―

H・J斗争二周年の記念すべき集会に結集された同志・友人諸君・人民の皆さんに、私は苦しみと徹底的な自己批判をこめて、連帯のアピールを送ります。
私は最初に次の事を指摘するのをお許し願いたい。もしこの集会が真にプロレタリア人民の集会であるならば、又あろうとするならば、そのスローガンに、H・J二周年記念・銃撃戦断固支持・十二戦士哀悼と供に、あの忌わしくも痛ましい事件に対する批判と糾弾のスローガンをつけ加えるべきであったと。或いはもしこの集会が連合赤軍もしくは赤軍派や中核共斗の立場に立つというものであれば、あの事件に対する徹底的な自己批判のスローガンをつけ加えるべきであったと。
今我々は三つの事柄を前にし、それをめぐってブルジョアジーとの厳しい、激烈な斗いに直面しています。三つの事柄――それは軽井沢の革命的な銃撃戦であり、又あの忌しく痛ましい事件であり、そして両者を徹底的に利用して組織されている荒れ狂う反革命弾圧■攻撃です。我々はこれら全てに於いて敵权力・ブルジョアジー[redacted]と断固斗わねばならず、どれ一つとして曖昧にしたり、避けて通ったりする事はできません。我々は

革命的な銃砲戦を断固支持するし、又しなければなりません。又ブルジョアジーの一切の反革命弾圧攻撃一切論連合赤軍の戦士達に対するそれをも含めて一と断固斗わねばなりません。これは欠かすことのできない階級的責務です。しかし又同時に我々はあの事件、我々の誤り[redacted]とることのできない弱点に対してもしっかりした態度をもたねばなりません。何故なら今敵权力、ブルジョアジー[redacted]は、この事件、我々のこの弱点こそ徹底的に攻撃し、最大限に利用し、革命派とプロレタリア人民を分断し、革命派を潰しプロレタリア人民を反革命体制に屈服させ、結集し、動員、組織し、統合しようと、気狂いじみて攻撃を加えているからです。そして革命派はこの事件、この弱点をめぐって主体的危機に立っており、敵权力への屈服や、或いはプロレタリア人民からの完全な孤立や、更には内的退廃と堕落の危機にさらされているからです。だからこそ革命運动を担っている全ての人々はこの事件を避けて通ることはできず、まさにブルジョアジーの最大の攻撃の環、鉾先となっているこの点で断固として対決しなければなりません。今こ[redacted]れを曖昧にし避けて通ることはブルジョアジーへの屈服、敗北主义を意味するからです。又現に日本共产党は最も執拗に、精力的に革命派の根絶キャンペーンを張り、更には毛沢東思想と結びつけて反中国（共产党）熱を煽

り立てているではありませんか。

プロレタリア人民はこの事件を批判し糾弾しなければならない。思いきって徹底的に批判し、糾弾しなければならない。そしてこの批判と糾弾を必らずプロレタリア共产主义革命運动の成長の糧とし、その見地と原則を打ち鍛え、自分らを一层強固で、堅固で、豊かな革命主体へと高めていかねばならない。そのためにこそ、その見地からこそ批判し、糾弾し尽さねばならない。これ自身ブルジョアジーとの激しい、鋭い斗いに他ならないのです。これを最もよくなしうるものこそな权力、ブルジョアジーの反革命弾圧攻撃と真に対決し、断固斗い、連合赤軍[redacted]の戦士達への攻撃とも斗うことなできるのです。とりわけ、銃[redacted]撃戦を断固支持することゝこの事件を批判し、糾弾し抜くことゝ权力の一切の反革命弾圧攻撃と断固斗うことゝを結合し、この結合の中から真にプロレタリア的＝共产主义的革命主体を打ち鍛えて下さい。又この結合をもって深くプロレタリア人民の中にわけ入り、反革命体制への結集、統合攻撃を打ち破き、又权力と唱和する党派（とくに日共）を批判し抜き、大衆的反撃を組織し、大衆的攻撃へ発展させて下さい。今や最も深い、最も鋭烈なブルジョアジーとの対決を要求されています。

他方私は、或いは我々は、この事件について徹底的に、根本的に自己批判しなければなりません

。私や我々を根本的に自己切開し、誠実に、真剣に総括し徹底的に自己批判しなければなりません。それは今、私や我々をプロレタリア人民になすべきことであり、革命運动[redacted]への奉仕であると確信しています。これがたとえどんなに苦しいことであっても、私は断固やりぬく決意でいます。私を自身をプロレタリア人民の容赦なき批判の前にさらしプロレタリア人民によって鞭打たれること、その中で私自身の根本的な思想、政治、活動態度又我々の全路線等全てを点検すること、たゞこの試練を通してのみ、私や我々は真にプロレタリア的＝共产主义的革命家となることなできるのです。勿論私や我々はブルジョアジーへの憎しみと彼らとの断固たる斗争を一[redacted]瞬たりとも忘れはしないし、常にその先頭で斗い続ける決意でいます。敵权力、ブルジョアジーの反革命弾圧攻撃に対する大衆的攻撃の先頭に立つことゝ、このプロレタリア人民の前への徹底的な自己切開一自己批判とを結合すること、或いはこの自己批判とをテコとして大衆的反撃を組織し、それを大衆的攻撃へ発展させていくこと、このことを通してこそ、革命的な銃撃戦を真にプロレタリア革命運动の巨大な力として[redacted]継承したいと思います。ブルジョアジー[redacted]に対する共同の断固たる斗いの中で、私や我々の徹底的な自己批判と、プロレタリア人民の徹底的な批判と糾弾は、必らず手を携えて、一层

強固で、堅固で、豊かな革命主体を成長させ真にブルジョアジーを打倒する巨大な銃撃戦を可能とするでしょう。

H・J斗争の一周年ではなく二周年である今日は、この斗争自身よりも、その後の9人の斗いについて学ぶべきだと思われます。今年年頭9人の同志の、金日成日志に宛た手紙の観点を、我々も又しっかりと身につけなければなりません。それは又、我々を三里塚の大木よねばあさんの「戦斗宣言」の精神をしっかりと学び、われものとすることを要求します。又マルクス・レーニン主义を真剣に学ぶことを要求しています。そうする時、我々はこの自己批判を大きく前進させることなできるでしょう。そして今、下层に対する抑圧と、上层の堕落した国の腐敗を惨[redacted]憺させている時、圧制に対する受动的な状態を憤激を喚起の能动的な状態に変える革命的階級の能力をこそ、しっかりと培い、打ち鍛え強大な戦斗と勝利に向って前進していこうではありませんか。唯一の真に革命的な階級の力は不滅である。ブルジョアジーを打[redacted]倒し、プロレタリア独裁を斗い取り、共产主义社会を打ち鍛ていく、この階級の政治的発達と強大な革命的力の育成・発揮にこそ勝利の道なある。